

カンタータ《恐れおおくも我らがフェルディナンド4世国王陛下の

めでたき誕生日のために》(通称《ジュノーネ》) 作品解説 水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』第21号(2001年)所収の拙稿『ロッシーニ全作品事典(16) 第II部門:劇音楽とカンタータより4作品』。改訂稿を決定版としてHPに掲載します。(2012年12月)

ジャンル カンタータ (Cantata) 註:舞台形式のカンタータ。

題名 《恐れおおくも我らがフェルディナンド4世国王陛下のめでたき誕生日のために》(*Pel faustissimo giorno natalizio di Sua Maestà il re Ferdinando IV, Nostro augusto sovrano*) (通称《ジュノーネ (Giunone)》)

作曲 1816年1月初旬(解説参照)

作詞 アンジェロ・マリーア・リッチ (Angelo Maria Ricci,1776-1850) イタリア語

初演 1816年1月12日(金曜日)ナポリ、サン・カルロ劇場

人物 ジュノーネ Giunone [ユノー-Juno] (ソプラノ b-b⁷)

註:古代ローマ神話最大の女神で結婚生活の保護神ジオーヴェ [ユピテル] の妻。

他に、男性祭司と女性祭司の合唱

初演者 イザベッラ・コルブラン (Isabella Colbran,1784-1845)

編成 ソプラノ独唱、合唱(ソプラノI・II、テノールI・II、バス)、管弦楽(2フルート/ピッコロ、2オーボエ、2クラリネット、2ファゴット、2ホルン、2トランペット、3トロンボーン、弦楽5部)

演奏時間 約12分

自筆楽譜 ニューヨーク、パブリック・ライブラリー/リンカーン・センター附属図書館

初版楽譜 次の全集版

全集版 II/4 (Ilaria Narici 校訂) Fondazione Rossini, Pesaro, 1999.

構成 (全集版に基づく。ナンバーは校訂者による)

N.1 合唱とレチタティーヴォ〈新床の女神は Dea, cui d'intorno ai talami〉(ジュノーネ、男性祭司と女性祭司の合唱)

N.2 ジュノーネのアリア〈時は過ぎ、月桂樹は枯れ Passa il Tempo, e I lauri sfronda〉(ジュノーネ、男性祭司と女性祭司の合唱)

解説

1815年10月4日にサン・カルロ劇場で初演したロッシーニのナポリ・デビュー作《イングランド女王エリザベッタ》が大成功を収めると、これに満足した興行師ドメニコ・バルバーイアは、翌1816年のために二つの新作を求めた。ロッシーニはこれに先立ちローマのヴァッレ劇場からも新作を求められ、その作曲のため10月末にナポリを発った。これが《トルヴァルドとドルリスカ》として初演されるのは12月26日、カンタータ《恐れおおくも我らがフェルディナンド4世国王陛下のめでたき誕生日のために》がナポリで初演されるのはその17日後、1816年1月12日である。

ロッシーニはバルバーイアからナポリの二つの王立劇場(サン・カルロ劇場とフォンド劇場)の音楽監督を任されており、彼は事実上の王室付き作曲家として国王一家のさまざまな祭事——国王夫妻の誕生日や聖名祝日、婚礼など——にカンタータを提供し、これを演奏する義務を負っていた。ナポリ王フェルディナンド4世(Ferdinando IV, 1751-1825)の誕生日が1月12日であることから、ロッシーニはおそらく《トルヴァルドとドルリスカ》初演後ただちに——当時の慣例に従って最初の3回の上演を監督した後に——ナポリに戻ってカンタータを作曲、稽古をつけて初演するという離れ業を演じなければならなかった。

それだけではない。驚くべきことにロッシーニはヴァッレ劇場の稽古中にアルジェンティーナ劇場とも新作交渉を行ない(《セビーリャの理髪師》として成立)、その契約を12月26日¹、すなわち《トルヴァルドとドルリスカ》の初演初日に交わしていた。この契約書には1月16日までに第1幕を完全に仕上げる事が明記されており、ロッシーニはナポリに戻ってカンタータを作曲上演した後、すぐにローマへと戻りてオペラの第1幕を完成するつもりだったことが判る。

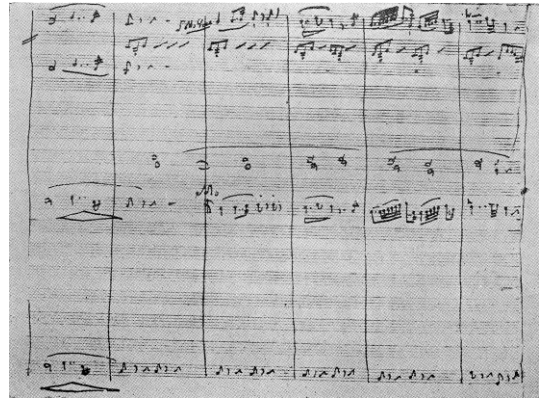
こうしたスケジュールが作品のあり方に影響しないはずがなく、本作もロッシーニの同種のカンタータに比し

て規模が小さく、旧作の転用を中心に作られている。二つある楽曲のうち最初の合唱は《パルミラのアウレリアーノ》(1813年)導入曲の冒頭合唱〈偉大なオジリデの妃 (*Sposa del grande Osiride*)〉の改作で、これに《トルヴァルドとドルリスカ》導入曲のオールドウ公爵の歌に用いたクレシェンドが接ぎ木されている。第2曲ジュノーネのアリア〈時は過ぎ、月桂樹は枯れ (*Passa il Tempo, e I lauri sfronda*)〉のカバレッタ主題は《トルヴァルドとドルリスカ》第2幕ドルリスカのアリア〈断固として、揺るがず、動かさず (*Ferma, costante, immobile*)〉(N.10)のカバレッタから転用された。しかし、コルブランのために書かれたこのカンタータでは総じて原曲よりも技巧を高め、華麗な装飾歌唱を披露させている。

テキストを書いたアンジェロ・マリーア・リッチ (Angelo Maria Ricci, 1776-1850) はアブルッツォのモポリーノに生まれ、ナポレオンの妹婿ジョアシャン・ミュラのナポリ治世時代 (1808~1815年) にその息子の教育係を務め、王制復古後もナポリ王家に重用された詩人である。

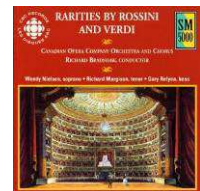
このカンタータはフェルディナンド4世の誕生日 (1816年1月12日) に、豪華な舞台装置と衣装を伴ってサン・カルロ劇場で初演された。王制復古で国王がナポリに復帰した半年後とあって、この日はナポリにとって特別な祝祭日となった。宮廷では当日の朝、王への恭順を示す儀礼が行なわれ、夕べには王の臨席によりバレエ《報われた美徳 (*La virtù premiata*)》(ガッレンベルクの貴族ヴェンツェル・ロベルト作曲) と本カンタータの演奏が盛大に行なわれ、成功を収めた³。

機会作品のため一度も再演されることがなく、自筆楽譜もある段階で行方不明となっていたが、1945年にその一部がフランコ・アッピアティ『音楽史 (*Storia della musica*)』第4巻に写真掲載され、知られざるカンタータの存在が明らかになった (図版参照)。この自筆楽譜は後に幾つかのオークションを経て、1980年12月10日にハンブルクで行われた競売でニューヨークのパブリック・ライブラリーの所有となった。ロッシェニ財団による最初の校訂譜は1991年に成立し、同年8月21日、ペーザロのロッシェニ・オペラ・フェスティヴァルにおいて175年ぶりの復活演奏が行なわれた (テアトロ・ロッシェニ。指揮: ガブリエーレ・フェッロ、ジュノーネ: モニカ・パチェッリ)。なお《ジュノーネ》はあくまで通称であり、正式名称とするのは適切でない。



《畏れおおくも我がフェルディナンド4世国王陛下のためてき誕生日のために》自筆楽譜より²

推薦ディスク リチャード・ブラッドショー指揮 独唱: ウェンディ・ニールセン (1994年録音 CBC Records)



¹ 《セビーリャの理髪師》の契約を12月15日とする文献は誤り。

² Franco Abbiati: *Storia della musica IV*, Milano, 1945, p.57.

³ 詳細は翌日の『両シチーリア王国新聞』(1816年1月13日付) で知ることができる。全集版序文 pp.XXIX-XXX.に引用。